

# 東北の都市計画—その在り方を求めて

南 正昭 岩手大学／東北支部支部長

## 1. 東北の都市計画

岩手県の県都盛岡は、5月半ばに田植えの季節を迎える。水田は、疎水を通して運ばれた雪解け水で満たされ、美しい田園風景を描き出す。同じころ都市近郊の牧草地も緑が深まりはじめ、一幅の絵画のように牧歌的風景が描き出される。奥羽山脈と北上山地、北上川など、壮大な自然景観がそれらを大きく包み込んでいる。

この盛岡都市圏は、岩手県内において唯一、線引きのある都市圏である。自然豊かな広大な国土に、都市部が点々と分散して存立する。それが東北全般の都市なるものの在り様だといえる。都市計画法に基づき、都市計画の立案と運用を進めながらも、その都市ならではの固有の歴史文化に、こだわり育みたくなる。東北の都市はそうした多様な魅力を湛えている。

都市計画学会東北支部は、これまでも、またこれからも、東北の都市の姿、在り様を掘り下げていく場になるものと思われる。ここしばらく、東北支部で行われてきた取り組みも、期せずしてこの東北の都市の魅力に焦点を当てたものになっている。講演会、勉強会、現地見学会、そして支部研究発表会、いずれも東北の都市の在り様にこだわった内容が多い。この東北支部の活動は、都市計画の現場、まちづくりの実践と共鳴し合いながら、東北の未来を創り出していくものと思われる。

## 2. 先達に学ぶ

去る2022年4月2日、東北支部では、支部総会に併せて記念講演会を開催した。長く東北の都市計画に学術的、また実務的にもご貢献されてきた北原啓司先生と中出文平先生がご退職を迎えられ、両先生の歩みと都市計画への思いについて講演をいただいた。

北原啓司先生には、「東北の都市計画に宿る光一眞のまち育てへ」と題してご講演をいただいた。

定住型の縄文集落の三内丸山遺跡や平泉の藤原文化などの歴史から、東北は周回遅れなのではなく、トップを走っていたのではないかと、との問いかけにはじまり、固有の時間軸を生きてきた東北の都市デザインへの視座を示された。

青森県黒石市の「こみせ」や「かぐじ」が、ときに都市化に対峙しながら残され、今後もまちづくりに生かされようとしている経緯を紹介され、これからの資源を育てる時代に、本当に地方で必要な制度をいかに生み出すかが重要と説かれた。

東北発コンパクトシティとして、岩手県北上市の「あじさ

い都市」や、公民連携事業としての岩手県紫波町のオガールプロジェクト等を、東北の地方都市の先進的な取り組みとしてご紹介されるとともに、東日本大震災後の復興の経験から、中心市街地の課題解決において定期借地権等による土地ストックの活用が重要と指摘された。

最後に、フランス国外建築賞グランプリを受賞した弘前れんが倉庫美術館の完成までの道のりに触れられ、東北のデザインの可能性を示された。設計者である建築家田根剛氏の「記憶の継承」というデザインコンセプトを引用しつつ、「不可視の記憶を未来に向けて表現する」東北のまち育て、東北の都市計画の未来を語られた。

中出文平先生からは、「地方都市の都市計画にこだわって—東北支部を中心に—」と題してご講演をいただいた。

新潟県長岡市に赴任された当時、地方都市では都市計画技術者が少なかったこと、大都市対策に始まった都市計画制度は、地方都市での適用性が十分ではなかったことを振り返り、土地利用計画や制度を専門とし、研究は「専門医」として、地域へは「かかりつけ医」として歩まれてきたことを語られた。

地方都市における市街地の拡大がもたらす課題を整理された上で、大都市圏と地方都市で、生じている現象と都市計画制度の運用による対処方法が異なることを説かれた。

地方都市100市、東北では17市を対象とした実証研究をご紹介され、市街化区域の拡大にともなう密度の減少傾向や、地方都市、東北の各都市における市街化区域の指定への課題認識を示された。

加えて、都市計画への実践的な取り組みについて触れられた。東北を対象としたコンパクトシティや立地適正化計画、長岡市を対象とした中越地震後の中心市街地改革、青森県の都市計画マスタープランや土地利用規制・誘導、北上市の都市計画マスタープラン、東日本大震災市街地復興など、地域とともに歩まれてきた数多くの実践事例をご紹介された。

最後に、これからの課題として、東日本大震災後の都市計画、まちづくりへの貢献、人口減少下の地方都市圏が「生活の質」を維持向上させるための模索が必要と説かれた。

東北の都市計画を築いてこられた両先生の言葉をここに書留め、今後の東北支部の針路とさせていただきます。